

ずいそう

建設業を考える

井木久博



1960年（昭和35年）、私が大学を卒業した年であります。折しも“黒部の太陽”として小説や映画で有名になった、関西電力による黒部第4発電所の難工事が授業の話題になり実習にも選ばれた時期であります。国の内外を問わず、水力発電所建設の華やかになりし頃であり、ダム工事映画もしばしば上映されよく見に行った思い出があります。そして「土木は男の仕事だ」というわけで、国土建設に胸をふくらませ社会へと旅立ちました。初めて入った現場は“愛知用水”建設現場であり、愛知用水公団によるもので、日本で初めての本格的な機械化施工と言われるものだと思います。当時日本には金も技術もなく機械もない、そんななかで世界銀行から金を借り、アメリカから技術、機械を借り、アメリカよりリースされた大型のモータースクレイパー、パワーショベル、ブルドーザー等がうなりをあげ時折アメリカ人のインスペクターが巡回してくる、そんな光景であります。そして我々新入社員は夜になると、アメリカの土質試験仕方書、コンクリートマニュアル、工事仕様書を勉強するといった具合でありました。その用水の完成を見届け、次に滋賀県の名神高速道路、さらに東海道新幹線建設工事へ従事しました。何れも“NHKのプロジェクトX”で放映されたものであります。それらが今いかに日本経済の基幹をなしているかを考えるとき感無量のものがあります。

さて、現在の日本の建設業界を取り巻く環境を考えると、正に忸怩たる思いにかられる昨今であります。連日の新聞報道を見るにつけ、建設業者はまさしく

悪徳業者呼ばわりの感があります。成熟社会へと成長した今、昔のシステム、考え方は時代遅れと言うことを教えている訳であります。建設業は何をすべきか、一般の社会市民は建設業に対しどう考えているのか、果たして社会基盤整備は必要ないのか、地球温暖化等自然環境が激しく変化するなか天然災害への備えは今のままでいいのか、高齢化へのハード面の対応はどうか、安倍総理の云う、“美しい日本”の構築はよく分かりますが、お題目を唱えるだけで一朝一夕には実現できないのであります。教育しかり、文化しかりであります。

今こそ、私たちは昔の請け負い企業から脱し、真に社会にとってなくてはならない建設業として社会的信頼を得るため原点に戻り、非常に難しく厳しい問題を解決していかなければなりません。そして将来に夢を描ける建設業をなんとしても創っていかなければなりません。

原点とは何か、其れは社会への感謝報恩、道徳観、企業としての倫理感であります。コンプライアンスについても、各自それぞれの立場で、真剣にチェックし取り組むことが必要条件ではないでしょうか。そのなかで建設業界の時代にあったシステム、再編等新しい仕組みも生まれてくるかもしれません。人間が作り出した問題は人間が解決できないことはないとは先人の名言であります。今こそお互いの英知を結集しプライドもてる、もの作り集団としての建設業を再スタートさせたいものであります。

—— いぎ ひさひろ (株)井木組 代表取締役会長 ——